

県都のまちづくり及び新ホールについて

1 県都のまちづくりに向けた「徳島駅北口・北側開発」の考え方

(1) 現状と課題

- 本県の魅力度アップに向けては、県都である徳島市のまちづくりが重要。
- 徳島駅周辺は、これまで車両基地が南北を分断し、人が行き交う「まちの回遊性」の観点から大きな課題となっている。
- 将来に向けて、徳島駅周辺の魅力を高めていくためには、「徳島駅北口・北側開発」の実現が課題解決の第一歩となる。
- 現在、全国各地で県都のまちづくりが進められている中、徳島駅周辺は進展が見られない状況を鑑み、車両基地の移設を着実に実現し、民間投資が期待できる「北側開発」の基盤整備に一刻も早く着手する必要あり。

(2) 方向性

- 「県都のまちづくり」に向けた新たな方向性として、現在の「新ホール計画地」にこの車両基地が移設可能か検討を行いたい。

2 「新ホール」の考え方

(1) 建設地

- 車両基地が駅北から現計画地へ移設する場合、新ホールの建設地を変更する必要がある。
- 既に県有地であること、あわぎんホールとの一体活用が可能となる点を踏まえ、「藍場浜公園・西エリア」を新ホール整備の候補地としたい。
- 同エリアは、徳島駅に近く、駅前商業施設等とをつなぐスムーズな動線を確保することが可能であり、川沿いにある「水都のランドマーク」として、新たなにぎわい創出につながる。
- 候補地の見直しにあたっては、「現計画」や「県市基本協定」等の扱いについて関係者との協議が必要であり、徳島市は土地の贈与や既存施設の取り壊しなどを負担していることから、意向を伺い、相互理解・相互連携の下で進める必要がある。

(2) 規模・機能

- 現計画で予定する舞台機能を維持し、クラシックやオペラ、ダンス、演劇など様々な演目に対応するとともに、
 - ・大ホールは1500席程度を下限に、
 - ・小ホールは隣接するあわぎんホールとの一体活用を視野に入れ、土地要件を踏まえた詳細検討が必要となる。

（ ※あわぎんホール 昭和46年9月開館（現在竣工52年）
施設長寿命化計画：使用目標 竣工65年 ）

- 徳島のアイデンティティを見て触って感じられるよう、県産木材や藍染めをはじめ、本県ならではの素材を積極的に活用する。

(3) コスト・スケジュール

- 今後、早期に施設規模・機能の検討を行い、具体化したい。